

## 師上田博先生を偲ぶ

瀧本和成

上田博先生は、立命館大学文学部を卒業後、大阪電気通信大学高等学校教諭となられ、三〇歳の折立命館大学大学院に進学。博士前・後期課程を経て、京都橘女子大学（現・京都橘大学）文学部に助教として着任し、一九八三年四月立命館大学文学部助教（一九八七年四月より教授）に就任されました。以来二三年の長きに亘り、本学で研究・教育に携わって来られました（二〇〇六年四月より名誉教授）。

研究分野は、日本近代文学を専攻され、とくに石川啄木の文学研究に於いて、小説・評論を中心とした散文から全歌鑑賞に至る韻文領域まで幅広く論究され、啄木文学の全体像に迫られた功績は、啄木賞（岩手日報文学賞）受賞、学位（博士）取得をはじめとして学会内外から高く評価されています。その他与謝野鉄幹・晶子、木下李太郎、若山牧水、正宗白鳥、石橋湛山、高田保馬、尾崎行雄など日本近代文学に流れる自由主義の水脈を短歌や小説、随筆、評論などさまざまなジャンルから掘り当て、時代の中に埋没してしまった良質な作品の再評価を行うと共に、文学研究

の意義や役割についても提言されました。これまで執筆された五〇冊に及ぶ著作と数々の論考は、新しい知見と高い見識が備わっていることは言うまでもありません。晩年は、ポトナム短歌会に入会し、歌集『食卓の津波』（白楊書院 二〇〇六・四）を刊行されています。作歌を通して歌詠み啄木や鉄幹、晶子たちの心の巖に触れようとする姿は、他の研究者の追隨を許さない深い洞察から来ているように思います。

先生が発表された研究論文は、分析、考察、論証をすべて兼ね備えた優れた論考ですが、決して硬苦しい文章ではなく、一文一文がとても魅力的で、素敵な文学的表現ともなっています。たとえば、「論文を書くことは、自分を問うことである。」（『日本近代文学を学ぶ人のために』一九九七・七）、「〔石川啄木〕を問うことは、ぼくとは何者かを問うこと」（『石川啄木 時代閉塞状況と「人間』二〇〇〇・五）、「近くに帰ってくるために、遠い処へ出かけていた」（『論究日本文学』二〇〇五・二）などの言葉は、論文を書くという行為の中に潜んでいる本質を穿った言葉であるよ

うな気がします。

学会活動も精力的にこなされ、国際啄木学会会長として、『石川啄木事典』（おうふう 二〇〇一・九）の編纂・刊行や年一回の大会だけでなく、春のセミナーを設置し、若手研究者の育成に努めたこと、国内外からの学会会員増を実現したこと等々、質量共に比例する形で飛躍させたことは周知の通りです。

教育分野では、読書する楽しさや作品鑑賞の面白さ、それらから「知」の発見や企みを味わう醍醐味を、そしてやがてその感動や愉しさが研究へと連なる（道である）ことを、先生自ら情熱をもつて（実践される姿を通して）私たちにお教えくださいました。卒業生の中には直接そのような先生の影響を受け、教育や研究への道を選んだ者も少なくありません（まさに私もその一人です）。また、大学や学会という狭い枠に囚われず、勉強会や講演会などさまざまな文芸（サロン）の場を提供（たとえば、明治文芸講演会等）し、文学や芸術を愛する人たちとの交流を続けて来られたことは、私たち教え子一人ひとりにとりましても活きた財産となっています。

退職年（二〇〇六年）一月二日立命館大学末川記念会館ホールに於いて「御退職記念最終講義」が行われた折も、これまで指導を受けた卒業生をはじめとして約一五〇名が集まりました。参加者たち全員（先生に対する）思いが昂じたせいしか会場は熱気に満ち溢れ、進行役で舞台の袖にいた私の眼鏡が曇ったほどでした。講義に先立ち、学部を代表して木村一信学部長（当時）から

ご挨拶と先生のお人柄や経歴・業績をご紹介戴き、その温かいお人柄と業績の数々を耳にし、あらためてその偉大さを実感したのでした。ご講義は、「啄木研究四〇年」と題され、とくに専門とされた石川啄木文学の四〇年に及ぶ研究の中で、啄木（文学）や恩師（國崎望久太郎、石井勉次郎、和田繁二郎先生）たちとの出会いによってどのように問題意識が広がり、研ぎ澄まされていったか、また、研究・教育活動を通して自ら時代・社会と対峙してきたかが具体的に自己の実生活や経歴を通して語られ、受講者一同胸を打たれたのでした（会場のあちこちで手巾を目にあてる人を見かけました）。講義終了後文学部、人文学会、卒業生等それぞれの代表者から花束が贈呈され、盛大な拍手のなかで閉講となりました。引き続き末川記念会館内レストラン・カラムで卒業生、学生、教職員ら六〇名以上が出席し、懇親会が催され先生を囲んで親睦を深めたのでした。また、後日（二月二六日）退職記念会が催され、大学や学会・研究会そのほかさまざまな場でご教示戴いた教え子たち七五名が集いました。そのとき体験しました温かたやおやかな雰囲気（私は）いまでも忘れることができません。それは、先生が文学研究（あるいは立命館という学び舎）を通して人間の生き方や社会の在り方を考える機会を与えてくださったこと、そうした環境の中から個々の問題意識が深まり、互いが切磋琢磨する中で自立精神が養われたこと。そのような経験を通して友情という輪が広がって行ったことを参加者皆で共有し、再体験する場（機会）となったのです。（司会を務めるなか）学生生

活の記憶（思い出）が鮮明に甦ってきたのでした。

研究指導や研究書を通して、先生は私たちに様々なことを教えてくださいました。作品の中から登場人物たちの心情、思考、価値観を引き出すことの大切さ、論証する際の資料の慎重な選別、先行研究批判の在り方などがそれに当たります。また、作者と作品、読者、これら三者の有機的関係を視野に入れ、作者の意図、作品の主題、読者の受容を文学研究に示すことの重要性もご教授くださいました。それらの教えをしつかり胸に刻んで、後輩たちに伝えると共に（私の）これからの研究に生かして行きたいと考えています。と同時に先生の真摯な研究態度や文学（研究）への燃え滾る情熱を少しでも感得できますように努力してまいりたいと思います。

（たきもと・かずなり 本学教授）